

# 南方（フィリピン）

## 数奇の運命

### 戦車第二師団の生き残り

愛知県 和 氣 清 明

私は、大正九年一月十日、愛知県大牟田で生まれた  
（旧本籍は岡山県赤磐郡能山町徳富）。

昭和十八年一月五日、三井鉱山北海道上砂川鉱業所  
経理課勤務中、臨時召集の電報を受け取った。一月八  
日、父が福岡県田川郡三井鉱山田川鉱業所に勤めてい  
たのでまず田川へ行き報告した。

一月十五日、姫路の野砲兵第十連隊留守隊へ入隊。  
いったん、即日帰郷を申し渡された。身長一六〇センチ

チ、体重四五キロで第三乙種ではあったが、胸部疾患  
は無い。昭和十六年三月、福岡の高商卒で弱そうに見  
えたので意外な結果だった。複雑な気持で平服に着替  
え、旅費を貰うばかりになっていた。

ところが、軍医から痔瘻の者が出て、定員が一人足  
りなくなったとのことで、私の即日帰郷は取り止めに  
なり、員数で私が満州へ行くことになった。私の運命  
はその時変わった。

一月二十五日頃、姫路を出発。二月初め満州東安省  
勃利に到着し、戦車第二師団、機動砲兵第二連隊第二  
大隊第五中隊へ入隊。保護兵として毎月、月例診断で  
大判のレントゲン写真をとられた。

乙種幹部候補生に採用されたが、教育が始まる前に  
痔で入院した。痔は手術しても約二週間で退院できる。

「学校教練をやった者には、それくらいはすぐ取り戻せるから、今のうちに手術してこい」と言われた。ところが、軍医が伝染病で隔離され、一カ月待機させられた。やっと軍医が退院し、手術台の上上がったら、身体が弱っているので手術は無理だったようで、緊急に脱肛を折り曲げ大腸に縫い付ける手術になった。肛門に銀線が入り治癒まで三カ月と言われた。

ところが、歩兵連隊に集団赤痢が発生し、師団の病院がいっぱいになり、私は牡丹江の陸軍病院に後送された。入院中も幹部候補生の座金を付けていると進級し、伍長になっていた。

八月に治癒退院し、原隊へ復帰した。入院以来三カ月を経過し、幹部候補生免除の申請が出された後での帰隊であった。連隊は演習でほとんど空っぽ、私は伍長なので衛兵司令を一回やり、帰隊後一週間目に幹候免除の命令があり、二等兵に逆戻り、同日付で一等兵となった。

九月の満期の時兵長で、再召集の時に伍長となった。予備役主計下士官候補者に採用され経理部勤務となっ

た。昭和十九年春、露語通訳要員候補者として、ハルビンの中学校の分校へ行ったために渡比要員から外され、満州残留となったが、部隊が渡比一週間前に第二大隊本部暗号手要員となった。

昭和十九年八月十三日、勃利出發。八月二十一日、釜山港出發。福岡県有明灣三池港で船団編成し、二十七日、第二船団「天日丸」で出港。

九月八日、北サンフェルナンド港着、人員のみ下船した。十三日、マニラ港に着き、揚陸作業をし、北競馬場に入った。二十一日、北競馬場にてマニラ空襲。九月末、ラブナ湖南、ロスバニョスよりさらに南のカラワンへ、椰子林の中に戦車第六連隊と機動砲兵第二大隊、機動歩兵二大隊第六中隊、工兵整備隊の井田支隊がいた。

十月、痔疾にてロスバニョス陸軍病院に入院。十二月三十日、部隊は北へ移動、三十一日、退院し部隊を追及のためトラックに便乗し、夜半に部隊へ到着した。

昭和二十年一月十日（この日は私の誕生日なので特に記憶あり）、サンホセの教会に燃料、弾薬を集結。

朝食後、住民の小屋の二階からはしご階段で下へ降りる途中でP38ロッキード三機に機銃掃射を受けた。隠してあった微発した黒塗りの自動車、最初の小型爆弾で覆いがふっ飛び、敵に車が発見されたものである。

私は柱の根元にうずくまり、弾をよけるような形になった。銃撃で小屋の屋根、天井、壁などが飛散し、頭から覆いかぶさり身動きができない。同時に周囲が真っ暗になり、闇の中に吸い込まれたような感じであった。このとき、子供の頃からのことや母親のことが次から次へと走馬灯のように思い出され、夢を見ているような良い気分になった。柔道で首を締められた時に、すーっと意識が無くなると聞いたことがあったが、これがそうかと思ひ、「これで私は死ぬのだ。このような比島の田舎で死ぬば、親や兄弟にも知られずにならぬのか」、また、半面「このまま極楽へ行くのか」とも思っていた。

どのくらい経ったのか、またロッキード機から掃射があり、身体に覆いかぶさっていたものが飛散して、パァッと眼前が明るくなり、手や足が動くようになり、

足に触ったらちゃんと足が地に着いていた。私は死んだと思っていたが、生きているんだと思い小屋の外へ出た。

防空壕の中から古参兵たちが呼んでいた。駆け寄ろうとすると、また機銃掃射である。思わず地面に張り付いてじっとしていたが、三機が交替で撃ってくるらしく、そのまま動けず終わりまで我慢するより仕方がなかった。今度は命中するか、いよいよ私の運もこれまでかと思うと、思わず「神様助けてください」と祈った。

こんどは身を隠す物は何もなく、銃弾が身近に着弾し、その衝撃がピンピンと伝わってくる。このときの何とも言えないような気持ちは、五十余年経った今でも、よく覚えていてゾッとする。私から二メートル程離れた所で一人の兵隊が叫んでいた。「石橋上等兵はここにおろぞ、撃つなら撃てみよ」と大の字になって叫んでいた。マラリアの高熱のために脳障害をおこしたものであったが、彼にも一発も当たらなかった。

やがて、ロッキードも去り、私と石橋上等兵がいた

所を調べてみたら、「屋根のトタン板が下に落ち、その上に私たちは這いつくばっていたようで、そのトタン板には無数の弾痕があり、皆は「よくこれで一人とも、一発も当たらなかったとは、何と運が良いことだ」と、あきれ顔であった。私は、我が身の幸運を神様に感謝した。

私と一緒に二階にいたK一等兵が下りて来ないので、引き返して梯子を上ってみたら、私の次に下りるつもりで、私の下りるのを見ていたのだろう。頭を下り口に向けた恰好で首に機銃弾を一発受け即死していた。彼が先に下り、私が後であつたら、私がここで死んでいたかもしれない。

戦後、彼の遺族を探し、戦死の模様を伝えようとしたが、とうとう分からなかった。召集前に、神戸三の宮駅前でバナナ屋をやっていたと聞いたので、神戸在住のシベリア帰りの戦友に調べてもらったが分からなかった。そこで私は直接兵庫県救護課を訪ねたが、兵庫県出身ではないということで、係の方のアドバイスを受け岡山県庁と鳥取県庁に尋ねたら岡山で反応があ

り、岡山に義弟がいるとのことだった。K氏は昭和二十年四月十日にサラクサクで戦死、階級は伍長であるとのことだった。

私が眼前で見たことあまりに違うので、戦友会の先輩に相談したが、負け戦では正確な情報は伝わらず、このようなことは他にもあるらしい。せつかくこの内容でお祀りをしている御遺族には、いまさら本当のこととは言わない方がよいとのことだったのでそうすることにした。その後慰霊祭の案内状を戦友会の名簿を回封して送付したが何も返事はなかった。

一月中旬、私たちはゴンザレスのある村に布陣していた。第二大隊長は大室金城少佐、副官・山崎中尉、指揮班長・湯口中尉、第四中隊長・三瓶大尉、第五中隊長・鳴坂中尉。装備は十センチ榴弾砲八門（二個中队）、戦車一四〇一五両、工兵一個小隊で約四〇〇人の兵力であった。当時の日本陸軍としてはちょっとした戦力であった。

昭和二十年一月二十九日早朝、約一キロ前方の部落で「のろし」が三発上がった。このとき、私は夜中か

ら歩哨に立ち、申し送りは「前方の部落でのろしが上がったら米軍が進行してくるといふ合図だから注意して見逃さぬように」ということであつた。そこで私は直ちに大隊本部指揮班湯口中尉を起こし報告した。他の人たちも起きてきたが、その時のろしは消えており、「お前は本当」にのろしを見たのか、夢でも見たのではないか」と誰も信用してくれなかつた。

しかし、米軍が進攻してくることを予想し迎撃の準備に取りかかつた。昼頃、米兵と土民兵が約二十人、陣地前方に現れたが、双方とも一発も撃つことなく緊張のうちに時間が過ぎた。我が大室支隊は大室少佐の下に、前述の如く野砲二個中隊（十榴八門）、戦車一個中隊（戦車十二両）、工兵一個小隊で約四百人の兵力で、国道八号線からちよつと東へ入つた脇道沿ひのゴンザレス丘に一月中旬から陣地をとつていた。

昼過ぎ頃「夜を待って、被害を最小限度に食い止め後退せよ」との命令があり、直ちに陣地を撤収し、ウミンガンへの道路上に戦車、トラック、砲運搬車を交互に組み合わせて一列縦隊になり、暗くなるのを待つ

た。私は当時、大隊本部暗号要員として、大室少佐や湯口中尉の近くにいつもいたが、私たち兵隊の間では「陣地を死守せよ」という教育を受けていたが「後退せよ」という教育は受けていないとか、それなのに、前方の米軍に背を向けて後退するのに「被害を最小限に食いとめて」とはどういうことだ、などと話し合つた。

やがて、周囲が暗くなり「出発」ということで、夕食は食わずに釜のままトラックに積み込み、大室少佐以下車に乗り込んで出発した。一〇〇メートルくらい前方でドカンという音がして火柱が立ったのが列の後方にいた我々にもよく分かつた。何があつたのかと思つていたら伝令がきて「米軍の戦車を一台やつつけた」と言つたので、周囲の者は思わず「万歳」といつたが、そのうちに「我々の行く方向になぜ米軍の戦車がいるんだ」という話になり、次の伝令で「先頭の友軍の戦車が右横から米軍の速射砲にやられて燃え上がった。後続の車は前に進めない」と言つてきた。

大室部隊長はすぐ「速射砲を撃て」と命令し、先頭

の十榴一門を砲運搬車から道路上に下ろし、零距离射撃で続けて三発発射した。ところが戦車隊から無線連絡が入り「友軍にあまり近過ぎて、友軍に犠牲が出るから撃たないで下さい」と要請があり、八門の十榴がありながらこの三発だけで、あとは一発も撃たなかった。

そのうちに米軍は照明弾を打ち上げ、あたり一面が昼間のように明るくなり、友軍の配置が手にとるようになり、周囲から米軍が、速射砲、機関銃、自動小銃、迫撃砲を撃ち始め、曳光弾がまるで仕掛け花火のように見えた。トラックの幌が燃え、積んでいた弾薬が弾けだした。

大室少佐は、大隊本部の者約十人を連れ、自ら抜刀して先頭に立ち「あの速射砲をやっつけるんだ」と走り出した。皆も大隊長に遅れまいと続いた。前進中、私は横列の一番左端にいた。足の脛を丸太棒で叩かれたような衝撃を受け、バツタリ前に転んだ。あと少しという所で足をやられ、銃弾が飛び交う中で、「今度はいよいよこれで終わり」と思ったが、足の痛みは感

じないし、足首は動いているようだし、手で触っても何ともないので、さっきは何だったのかと思ひながら再び前へ進んだ。手榴弾がやっと思ふ所に、敵から死角になった凹地があったのでそこへ飛び込んだ。すぐ右側に大隊長当番の森本上等兵が右手の指を負傷し「大隊長殿、手の指をやられました、痛いですよ」と叫んでいたが、どうしてやることもできなかった。私は手榴弾を右手に持ち発火させようとしたときに、鉄帽の上からガツンと何かに叩かれたように感じ、そのまま気を失ってしまった。

どのくらい時間が経ったのか、誰かにゆり動かされている感じがして眼を開けたら、米軍兵が銃を構えて何か言っており、横に土民兵が一人いた。思わず立ち上がるうとしたが、手と足を針金で縛られており、靴・眼鏡・時計・万年筆など身につけていた物は全部土民兵士にとられていた。

しばらくそのままにされていたが、その間に通信係の曹長や、兵器係の軍曹の凶囊を土民兵が持ってきたので、これらの人たちも戦死したのだと思った。約三

十分経って、怪しげな日本語を話す兵隊が来て足の針金を解いたので、歩いて道路へ出た。ちょうど三叉路になっていた所で、友軍の中戦車が真っ黒に焼けており、その戦車の手前に大隊副官山崎中尉が、戦車の方へ右手を伸ばすように倒れていた。

恐らく、昨夜出発時、速射砲にやられた先頭の戦車はこれだと思い、右横を見ると道から五〇メートルぐらいのところは大木が二本あり、その下に速射砲と重機関銃があった。この速射砲に先頭の戦車がやられて道を塞ぎ、後続のトラックや砲運搬車が立ち往生し、一本道で一列縦隊のところを米軍に思う様に狙い撃ちされたと思った。

太陽が昇る頃、MPが二人来て私を受け取り、ジープに乗せて大きな道を西へ向かい次の村に着いた。米軍のテントがあり、日本人のような顔をした米兵が三人いて、私を迎え入れ、水を一杯飲ませてくれた。投降した日本人かと思いい「日本人のくせに、米軍の服を着てどうしたんだ」となじったら、笑いながら「私たちは二世です。あなたをこれから収容所へ連れてゆき

ます。お友達がいるから心配しなくていいですよ」と言ったが、安心できず「いつ殺されるのか」と聞いたら「米軍は捕虜を殺しません」との答えだった。

収容所へ着いたら、日本軍のテントが一張りあって、先に収容された人が五人いた。海岸に近いところだったが、地名は分からなかった。そこに昭和二十年三月末頃までいて、戦車師団の関係者だけ十人が米軍の輸送機で、ニューギニアのホーランディア収容所に移された。

約一カ月間、完全に隔離されたテントで、戦車師団の装備兵力などについて尋問を受けた。「私は部隊がここへ来るとき、釜山から乗船し、初めて軍隊に入った召集兵で、教育もろくに受けていないので何も知らない」との一点張りで通し続けた。名前も田中秀夫と偽名を名乗っていた。

この姓名は、最初に会った二世の水筒に「田中」と書いてあったのでこれもらい「秀夫」は弟の名前をもらった。捕虜になれば再び日本の土を踏むことは無いと思ったし、もし私が捕虜になり、日本に連絡され

るようなことにでもなれば、両親や弟妹たちは恥ずかしい、肩身の狭い思いをするであろうと思ったからだ。私はゴンザレスで戦死したんだ。これからは「田中秀夫」で通そうと思った。しかし、一カ月の間、他に話す人もなく、毎日同じようなことを繰り返して尋問されるのには正直なところ参った。

ホーランドディアに二カ月、オーストラリアのブリズベンに一カ月、最後にニューサウスウェールズ州のヘイ収容所に着いたのは、昭和二十年六月頃であった。この地で終戦を迎え、翌二十一年三月にヘイを出発、四月に浦賀上陸、両親がいる福岡県大牟田に帰り着いた。

多くの戦友が戦死したのに、自分一人が生きておめおめ帰って来て、申しわけないという気持ちが高く、何とかして、戦友たちの慰霊と、私の眼前で戦死した戦友のことをご遺族に伝えたいと思ったが、どうしてよいか分からず長年苦しんだ。

昭和四十七年に愛知県三ヶ根山に、戦車第二師団の生還者の方々が中心となった比島観音建立を知り、お

手伝いするようになり、昭和五十八年には恩欠連運動のお手伝いもするようになった。

### 【参 考（追記）】

米軍の記録によれば、昭和二十年一月二十八日に、米第二十五師団の第三十五歩兵連隊は、ロサレスから八号線を東進して、ゴンザレスのバリオに到着し、第二十七歩兵連隊は迂回してゴンザレスの東、八号線上のペミエンタのバリオに入った。

当時、この二つのバリオの間に戦車第二師団の大室支隊（戦車一個中隊、砲兵二個中隊、工兵一個小隊）がいたが、この支隊は退路を塞がれ包囲を突破しようとして二五人の戦死者を出し、戦車八台、一〇五ミリ砲八門、トラック三十台を失い、辛うじて四台の戦車が脱出に成功して、ウミンガンに帰着した。

米第二十七連隊の損害は、戦死、戦傷四五人となっている、と小川哲郎氏著「北部ルソン持久戦」に記されている。

一〇五ミリ砲は三発だけ発射、野砲と工兵は本格的

攻撃はできず、もっぱら戦車が大いに撃ちまくったようであるが、友軍はほとんど動けず、機銃と弾薬を持ち出すのがやっとで、溝沿いにウミンガンへ脱出したという。

和氣氏が立哨中申し送った「のろし」（一月二十九日早朝）は誰が打ち上げたのか一つの不思議であったが、平成元年十月、三ヶ根山での戦車第二師団戦友会で、戦車六連隊の宮沢少尉、庄司兵長と知り合い、あの時の信号弾は庄司兵長が打ち上げたと言ったという。

また、十榴の零距離射撃中止を大室大隊長に進言したのは宮沢少尉であったことを知り、和氣氏の二人の証言者が生還されておることを不思議な縁としみじみ実感したと述べている。

また、大室大隊長突撃のとき、足に衝撃を受けて倒れた原因は、機関銃弾が両脚間をかすめて通り抜けたためで脚絆の内側が両足とも焦げていたと、我が強運に感謝していると言われた。

これは、P38双発米機の銃撃でK氏が戦死したことや、自分の倒れたトタン屋根の板には銃痕が無数にあっ

たが助かったことなどの幸運、さらに運命の別れみちは、入隊時の即日帰郷の取り消し、満州から南方に転じたこと。大室大隊のウミンガン路上での戦闘での米軍による収容……。まさに、多くの戦友が戦死し、自分一人のみが生還したという心情を持ち続け、慰霊と恩欠運動に余生を捧げたことも、生き残った我々と同じ心情であることを知った。

## バタアン、コレヒドール攻略

### 野戦重砲の砲手

茨城県 安達 義夫

私は大正十年十一月二十日、現在の銚田市の農家の三男として生まれ、学校卒業後は農業の手伝いをしていた。昭和十五年徴兵検査はもちろん甲種合格だった。

昭和十六年一月、東京世田谷の野戦重砲第八連隊補充隊に本隊要員として入営。昭和十六年七月一日、関特演、特編第一号により、編成下令された。その間、